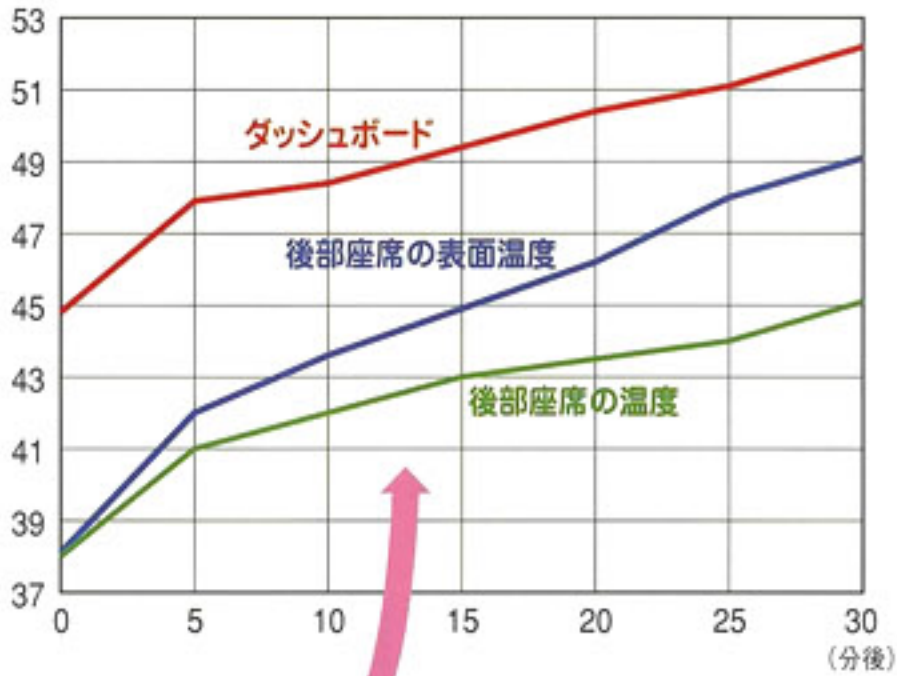


車内で留守番、
昼の散歩はNO!

測って実感、

車内の温度の変化



30分間冷房をつけて
走ったあと、
5分ごとに測定しました



15時から5分ごとに測定
しました。クルマ全体は日光
に当たっていましたが、車
内に直射日光は入ってい
ない状態でした。ダッシュ
ボードと後部座席の表面温
度は放射温度計で、室温は
温度計で測りました。

夏はクルマに乗せたまま待たせない
「車内で留守番させるのは、10分でも危険と心得て」と藤井先生。20分ほど車内で留守番させた犬が、熱中症になった例もあるのだそうです。
また、「犬の平熱は38℃と人より高く、暑さに弱い動物。走行中の車内温度は、人が寒いと感じるくらいに下げてあげるといいです。」(藤井先生)

わかった! 1
とにかく右肩上がりにぐんぐん上昇!

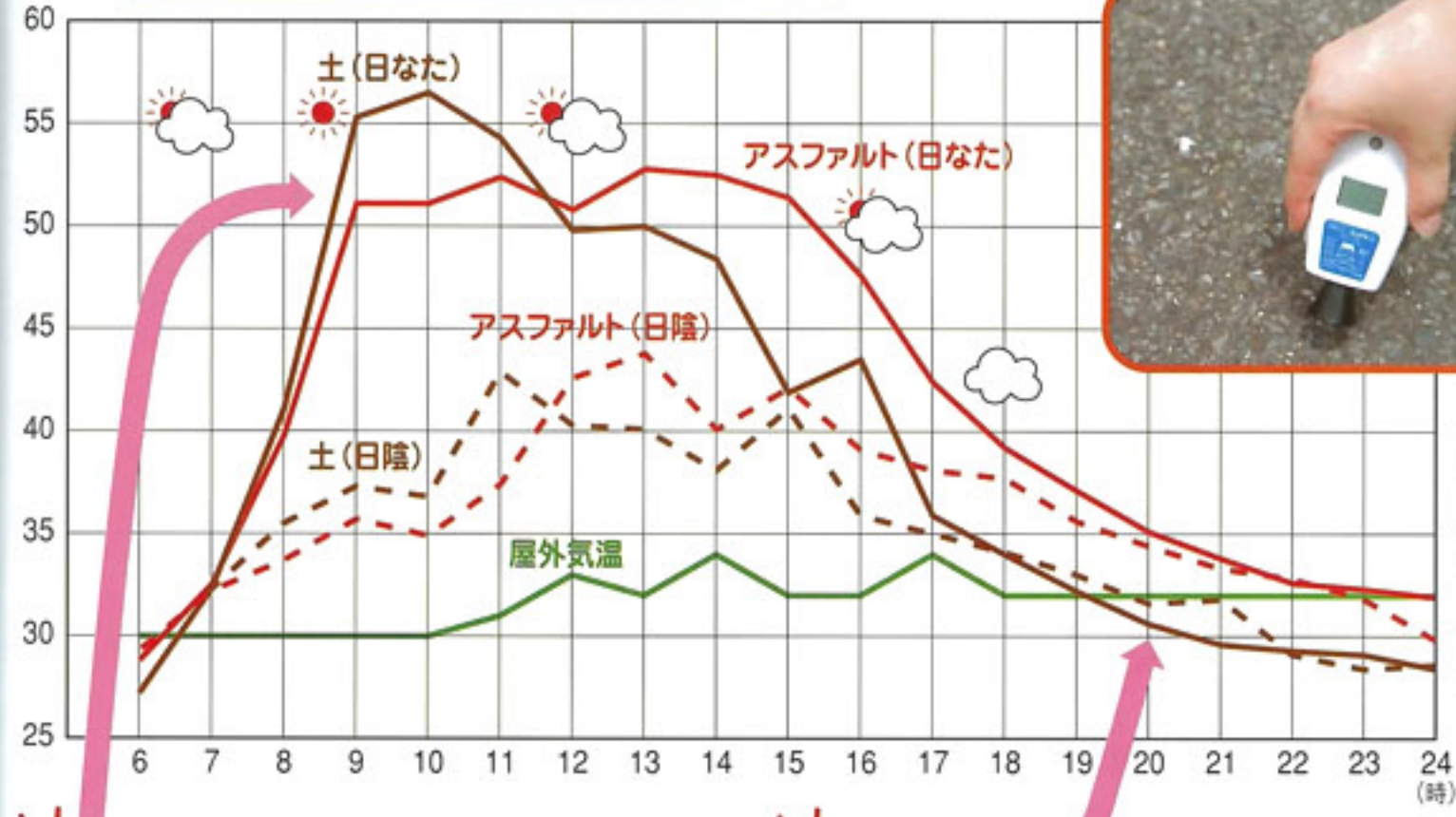
少し駐車しただけで、クルマの中が暑くなってしまうことを経験した人も多いでしょう。測定結果でも、車内の温度は右肩上がりに上昇。「窓を開けていたとしても、車内で留守番はさせないでほしいもの」と藤井先生。

危ない暑さ!

夏が暑いのは当たり前。でもそれってどれくらい? ということで測定開始!すると夏の暑さが、犬にとっていかに過酷かがわかる数字が……。愛犬との夏の過ごし方、犬の立場でもう一度考えてみてはどうでしょう。

監修/藤井動物病院院長 藤井康一先生
撮影/斉藤美春 イラスト/蛇蔵

アスファルトと土の表面温度の変化



放射温度計で1時間おきに測定しました



モノに触れずに表面温度が測れる放射温度計を使って、アスファルトと土の表面温度を測りました。測定日の8月4日は、8時から11時ごろまで快晴でしたが、それ以降は、曇りがちでした。

わかった! 1
日中スカッと晴れると路面は50℃を超える!

50℃を超える路面は、触れないほどの熱さ。「肉球がやけどをしたり、路面の熱で暖められた高温の空気を吸って熱中症になることも」と藤井先生。路面に近く、地面に直接足がつく犬は、路面の熱をまともに受けるのです。

わかった! 2
日が沈んでも路面は冷めにくい!

路面を触ってみて、ヒンヤリ感じるのは30℃以下になってから。しかし、20時になっても、アスファルトの表面は35℃の高温です。日が沈んでも、空気が暖められているため、路面の温度は下がりにくいのです。

だから

夏の散歩は
早朝にすませて

散歩は、早朝に行くのが理想です。路面の温度が低く、肉球のやけどや熱中症になる危険が避けられるからです。一方、日中の路面は、50℃を超えるほど高温。肉球がやけどをして、皮膚がペロリとめくれることもあります。また、犬がいる位置の空気は、路面の熱でかなり暖められています。暑い空気を吸って体温が上昇し、熱中症になる危険も。「早朝の散歩が難しいなら、日が沈んでしばらくして、路面が冷えたころに行きましょう」と藤井先生。



体が熱いと感じたら
首のつけ根・胴回りを
水で湿らせ
クールダウン

散歩から帰ったら、毛をめくって皮膚に触れてみて。「熱いな」と感じたら、左の図のように、首のつけ根と胴回りの毛をめくって濡れタオルや霧吹きで皮膚を湿らせます。そのあと、クーラーの効いた部屋に入れてクールダウン。ただし、長時間濡れたままにしないで。

注意
していても、
もしも……
熱中症に
なってしまったら
どうする?

春から熱中症にかかる可能性はありますが、熱中症にかかる頭数が増えるのは、やはり夏。夏の熱中症は、進行が速く、重症になるケースが多いのが特徴です。症状が出たら、すぐに冷やして!

どんな
症状? 落ち着かない様子で、
上を向いて荒く呼吸する

- 熱が高くなる、
- 体が熱い(40℃以上)
- 呼吸が荒い
- ヨダレがたくさん出る
- 立ったまま
- 上を向いて呼吸する
- 舌に力がなく
- ダラリと下がる
- 目がうつろ

どう対処
する? とにかく冷やして、
動物病院へ連絡する

- 愛犬に熱中症の症状が見られたら、すぐに冷やすことが重要です。家で症状が出た場合は、冷水のシャワーを浴びさせましょう。首と胴回りを中心に冷やすと効果的。体を冷やしすぎないように、動物病院と連絡をとりながら行って。
- シャワーの水を
- 首・胴回りを中心にかける
- 水風呂に入れる

